
遊戯王 Speedcross

slipstream

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王 Speedcross

【Nコード】

N9264Z

【作者名】

slipstream

【あらすじ】

チーム5d、sと未来人との戦いから数十年後、ライディングデュエルは大きな進化を遂げた。Dホイールから実車型のDRW（Duel Racing Wheel 通称ドロウ）に乗り込み、時速300キロオーバーのデュエルの領域に迫る！

序盤は遊戯王キャラ・オリキャラオンリーですが、Stage 6以降はクロスオーバー作品となります。

Prologue (前書き)

文法の使い方など不慣れなところもありますがご了承ください。
序盤は遊戯王キャラとオリキャラのみですが話が進むとクロスオーバー作品になりますのでそこら辺もご了承ください。それではよろしくお願ひします。

Prologue

俺の名前は空見 遊英^{ゆうせい}。ちょうど20歳。

デュエルが好きだった親父が名づけた名前で、デュエルで英雄になつてほしいという願いが込められている。

俺は今、DRWのチューニング(車を改造すること) ここではDRWを改造すること) ショップで働いている。客もそこそこ来るから休む暇はない。役に立ててうれしいと思うと心が満たされる。だが、そんなことでは完全に心が満たされるわけではない。デュエルはもちろん、レーシングデュエルをすることが俺の楽しみでもある。

レーシングデュエルは従来のライディングデュエルとは全く違う。ルールは基本的に従来と同じ。スピードワールドXという専用のフィールド魔法発動のもとデュエルを行う。変更点は、スピードカウンターがMAXで12個から15個まで溜まるようになった。スピードカウンターを2個取り除くことで自分モンスター1体の攻撃力を200ポイント上げる(エンドフェイズまで有効)、5個で自分の手札のスピードスペル(Sp)の枚数×300ポイントのダメージを与える、7個でデッキから1枚ドロ、10個でフィールド上のカードを1枚破壊、15個でデッキから2枚ドロという効果がある。当然、レーシングデュエル中はSpしか使用できない。

これが俺の愛車の黒のR35 GT-R Spec-V(もともと俺の親父のDRWだが、俺が18歳の誕生日のときに病気にかかり、最期にこのGT-Rを託し、この世を去ってしまった。。。そのとき俺は絶望したりもした。だが、いつまでも絶望なんてしてはいられない。未来を見ていきたくないとな。それに、天国の親父にも失礼かもな)。スピードメーターではなくモニターがある。ドライブモードになればメーターは表示される。デュエルモードで

は、ヘルメットに付いているマイクでやりたいことを言うとそれに反応してカードをプレイしてくれる仕組みだ。カードを伏せる場合は、ヘルメットが脳をスキャンし、何をしたいかを識別する。レーシングデュエルの際には中にあるデッキホルダーにデッキを入れ、デッキごとスキャンし、そのカードを使用できるようにする必要がある。エクストラデッキのカードもエクストラデッキホルダーに入れてスキャンすればそれらも使用できる。スタンディングデュエル用のデュエルディスクはトランクに装備されている。ハイブリッド式。

無駄話をしてしまったようだな。それじゃあ、俺のストーリーの始まりだ！レーシングデュエル、アクセラレーション！

「空見、もう今日はあがつていいぞ。」

「はい、店長。失礼します。」

8時半になる。早く家に帰る。母は遠くで働いていて戻ることは少ない。かえつてまずは飯を食べる（調理くらいはしたことある！）。その後風呂に入り、疲れたから寝るかと思いきや、10時ぐらいに外へ出て、DRWに乗り、ハイウェイへ行く。夜のハイウェイは景色がよくて、疲れも取れる。後ろからセキュリティの車両が通りかかる。

「なんだ、またハイウェイに居たのか。」

モニターに相手の顔が映る。セキュリティの牛尾だ。夜のパトロールのようだ。この人とはよく会う。

「うん、やっぱり夜のハイウェイはきもちいいからな。」

「お前もDRWでのドライブが好きなんだな。遊星みたいだな。」

「それもそうだけど、俺としてはレーシングデュエルが一番好きだ。」

「まあお前の気持ちは分かるが、せいぜい事故を起こさないように気をつけるよ。」

「ああ。」

牛尾との会話を終え、十分に走ったところでハイウェイを降りる。そんな中、一人の民間人が一人のチンピラに絡まれているのを見かける。

「おい！やられたくなければ俺様につよいデツキよこせよ！」

「それは・・・、できません・・・。」

今すぐにDRWから降りて、チンピラを止めにかかる。

「おい、そこでなにやってんだよ。」

「ああ、誰だあお前？」

「まずはその人を放してやれ。」

「やだね、強いデツキをもらってもないのにはなせるものか！」

「デュエルしろ。俺が勝ったら二度とその人に関わるな。」

「はん、上等だコラ。俺が勝ったら貴様のデツキをいただくからな！」

「いいだろう、ハイウェイに出る。」

二人はハイウェイに出た。まさに戦いの火蓋が機って落とされようとしていく。

22:40 ハイウェイ

「スピードワルドX、セットオン！！！！」

デュエルモード オン

「レーシングデュエル、アクセラレーション！！！！」

続

Prologue (後書き)

いかがでしたでしょうか。変なところも最初はありますがお許しを。不定期更新ですがよろしくお願ひします。

Stage 1 レーシングデュエル（前書き）

ここからオリキャラとオリカが登場します。LP表示など間違えていたらごめんなさい。またSPCは5dsと同じ増え方です。また、レーシングデュエルなのでDホイーラーからレーシングデュエリストという呼び方になります。

Stage 1 レーシングデュエル

「ニューステージ篇」#1 スタート

「レーシングデュエル、アクセラレーション！」

二人はデッキをDRWに内蔵されているデッキホルダーにセットしスキャンした。

俺のDRWのモニターにはデュエリスト情報が写っていた。名前はマイケルだ。先行後攻の決め方は先に第1コーナーを抜けた者が先行だ。2台のDRWはドリフトでコーナーに差し掛かる。遊英が先に第1コーナーを抜けた。遊英が先行だ。

「俺のターン！」

遊英 SPC1 手札6

「俺はダーク・エルフ・ブレイダーを召喚！」

ダーク・エルフ・ブレイダー（オリジナル）

ATK1400 DEF1200 闇 戦士 星4 効果

このカードが召喚に成功した時、

デッキからレベル4以下の闇属性モンスター1体をゲームから除外できる。次の自分のスタンバイフェイズ時にこの効果で除外したカードを手札に加える。

「俺はダーク・グレファアをゲームから除外する。カードを2枚セツトし、ターンエンド。」手札3

次はマイケルのターンだ。「俺様のターン。」

マイケル S P C 2 手札 6

「俺様はスモーク・ドラゴンを召喚！」

スモーク・ドラゴン（オリジナル）

ATK 1500 DEF 1300 闇 ドラゴン 星4 効果

このカードが破壊され墓地に送られた時、デッキから「スモーク・ドラゴン」1体を守備表示で特殊召喚できる。

「バトル！スモーク・ドラゴンでダーク・エルフ・ブレイダーを攻撃！スモークブレス！」

「くっ」

遊英 LP 3900

「カードを1枚セットしてターンエンド。」手札 4 セット魔・

罨 1枚

「お前のエンドフェイズに罨発動、闇の門！」 セット魔・罨 2
1枚

闇の門（オリジナル）

通常罨

自分フィールド上にモンスターが存在しない時、1000ライフポイントを払って発動する。デッキからレベル4以下の闇属性モンスターを特殊召喚する。

遊英 LP 2900

「俺はダブルコストンを守備表示で特殊召喚する。」

ダブルコストン DEF 1650 闇 アンデット 効果 闇属性
モンスターのアドバンス召喚時に2体分のリリースとして扱える。

「そして俺のターン。」

遊英 S P C 3 手札 4 枚

「俺はダブルコストンをリリース。こいつは闇属性のアドバンス召喚のためにリリースするならこいつ1体で2体分として扱うことが出来る！墮天使ゼラートをアドバンス召喚！」

マイケルはにやけた。おそらく畏だろう。

「へっ、かかったな！トランプ発動、奈落の落とし穴！攻撃力1500以下の各種召喚時にそのモンスターをゲームから除外する！」

「（すまない、ゼラート。）俺はカードを1枚セットしてターンエンド！」手札2枚

「俺様のターン！ふん、さあ、いくぞ！俺様はスモーク・ドラゴンをリリース！デスストーム・ドラゴン！」手札5 4枚 S P C 4

デスストーム・ドラゴン（オリジナル）

ATK3000 DEF1800 闇 ドラゴン 星7

このカードはリリース1体でアドバンス召喚することが出来る。この方法で召喚した場合、このターンのエンドフェイズ時に破壊される。1ターンに1度、相手の「フィールド上のカードを破壊する効果」を持つモンスター効果の発動を無効にし、破壊することが出来る。

「デスストーム・ドラゴンでプレイヤーにダイレクトアタック！」

「畏発動、聖なるバリア ミラーフォース！ 相手の攻撃宣言時に相手攻撃表示モンスターをぜんめつさせるぜ！」

またマイケルはにやけた。こいつを防ぐ罠があるというのか。
「馬鹿だなあ、カウンター罠発動。防御禁止令！」

防御禁止令（オリジナル）

カウンター罠

手札を1枚捨てる。攻撃宣言時に発動した魔法・罠・モンスター効果の発動を無効にし、破壊する。

マイケル 手札3枚

「……………」

遊英 LP100

「どうしたあ、最初はえらそうにしておいてたいしたことねえなあ。つて何でだ！なぜライフが100残っているんだあ！」

「俺は罠を発動していた。神の奇跡！」

神の奇跡（オリジナル）

通常罠

相手モンスター1体の直接攻撃によってライフがゼロになる場合、ライフポイントは100残る。

「ちっ、俺様はこれでターンエンドだ。エンドフェイズにデスストームは破壊される……………」

遊泳はピンチに陥ってしまった。次のドローですべてが決まる。

「（デッキよ、カードよ、俺はお前たちを信じてる。俺の心に応えてくれ！）俺のターン！」

手札3枚 SPC5

「（ちつ、まだ分からないか。だがこのカードに賭けるしかない。）俺はスピードスペル、エンジェル・バトンを発動！」

Sp エンジェル・バトン

魔法（スピードスペル）

スピードカウンターが2以上ある時、デッキからカードを2枚ドロ―し、手札を1枚墓地に送る。

「エンジェル・バトンの効果で2枚ドロ―！」手札5枚

果たして望みのカードはくるのだろうか。

「（来たか！ありがとよ！）俺はエンジェル・バトンの効果でキッズデビルを墓地に送る。」手札4枚

キッズデビル（オリジナル）

ATK500 DEF500 闇 悪魔 星3 効果

このカードが墓地に存在する場合、このカードをゲームから除外することで、デッキから「キッズデビル」1体を特殊召喚する。「キッズデビル」の効果は1ターンに1度しか使用できず、「キッズデビル」の効果によって特殊召喚されたこのカードがシンクロ素材のために墓地に送られる、またはエクシーズ素材から取り除かれる場合、ゲームから除外される。

「俺はキッズデビルを除外し、デッキのキッズデビルを特殊召喚する！」

「そんな雑魚を出して何が出来るんだあ、坊やあ。」

「お前は雑魚なカードがないことをしらないのか？なら見せてやるよ。スピードスペル スピード・ランクアップをキッズデビルに装備！」

SP スピード・ランクアップ

スピードスペル

スピードカウンターが3以上ある時、このカードはモンスター1体の装備カードとなり、装備モンスターのレベルを3上げる。 キツズデビル Lv3 6

「俺はまだ召喚をしていない。ゾンビキャリアを召喚！」手札3枚

ゾンビキャリア

ATK400 DEF200 闇 アンデット 星2 チューナー

このカードは手札のカード1枚をデッキの一番上に戻し、墓地から特殊召喚できる。そうした場合、フィールドから離れるとき、ゲームから除外される。

「レベル6のキッズデビルにレベル2のゾンビキャリアをチューニング！希望の光が集まりしとき、まばゆい光が勝利の闇へと変える。シンクロ召喚！いでよ、ダークエンド・ドラゴン！」

ダークエンド・ドラゴン

ATK2600 DEF2100 闇 ドラゴン 星8 シンクロ・

効果

闇属性チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

1ターンに1度、このカードの攻撃力を500下げることで相手のモンスター1対を選択して墓地に送ることが出来る。

「さらにスピードスペル、ソニック・バースト発動！ダークエンド・

ドラゴンに使用する！」

Sp ソニック・バースト

スピードスペル

スピードカウンターが5以上あるとき、手札を全て捨ててスピードカウンターを全て取り除いて発動する。モンスター1体の攻撃力は1500ポイントアップする。 ATK2600 4100

「そ、そんなあ。攻撃力が一気に4100に上昇しやがっただお！？」

マイケルは遊英の見事なコンボに驚きを隠せないようだ。

「終わりだ！ダークエンドドラゴンでダイレクトアタック！ダークフォッグ！」

「ぐああああっ！」マイケルLPO

決着はついた。2台は停車し、DRWを降りた。そこでマイケルは疑問を抱いた。

「なぜだあ、この強いデッキばかりを盗んで合体させて作った俺のデッキがなぜこんな野郎に……。」

そして、遊英は答える。

「ただ強いカードだけでは勝てやしない。というよりもカードは持ち主にしか応えてくれない。カードを盗んで最強になろうとする奴はレーシングデュエリストなんかじゃない！」

そう言い残してこの場を去るのだった。

翌日 某所

「あなたはこの間の。昨日はありがとうございました。あの人捕まったら幸いですよ。」

「礼には及ばない。もう奴はお前に関わることはないだろう。カードを盗んで強くなるうとする奴はレーシングデュエリストなんかじゃないときっぱり言っちゃったぜ。」

「本当にありがとうございます。」

「じゃ、俺は行くからな。またな。」

スタンディングデュエルにしろレーシングデュエルにしろ、

自分のカードを信じて戦うのはデュエリストの使命だ。

あきらめたらそこで終わりなんだ。

人のカードを盗んで強くなるうとするのは決して無理だろう。カードは持ち主の魂にしか応えてくれないのだから。

続

Stage 1 レーシングデュエル（後書き）

まだ書き始めたばかりなので不慣れなところがあります。どうかお許しを。では、次話もよろしくお願いします。

Stage 2 ケン（前書き）

どうも。それではこれまでの用語をまとめてみましょう。DRW^{ドロウ}車両型のDホイール。チューニング車を改造する（ここではDRWを改造する）こと。まあこんな感じかな。

では宜しくお願いします。

「ニューステージ篇」#2 スタート

Stage 2 ケン

某日 13:30 チューニングショップ

「なあ、お前レーシングデュエリストだろ？だったらさ、デッキとDRWのセッティング今度手伝ってくれないか？」

と、仕事仲間が話しかけてきた。遊英は、

「今度の土曜なら空いているから構わないが・・・。」

「そうか、なら良かった。じゃあ土曜の夜9時にAのパーキングエリアに来てくれ。」

このショップ内で一番デュエルが強いのはこの俺遊英と信じられている。その実力は店長も絶賛。それが理由で他の仕事仲間からデッキやDRWのセッティングの相談をよく受けたりする。知識のない奴だなと思ったりする遊英。まあセッティングを手伝ったりするのはつまらないことではないけどな。

某日 21:00 Aパーキングエリア

「よお、来てくれたか。早速だがエンジン見てくれ。」

と、嬉しそうに話す仕事仲間。おつと紹介が遅れたな。彼は仕事仲間のケンだ。彼もまたレーシングデュエリストだが実力はイマイチ。登場DRWは白のCE9Aのランサーエボリューション3。

そこで遊英の質問に入る。「このエンジン、自分でチューニングしたのか？」

「ああ、けっこう時間はかかった。」

完成にかなりの時間を費やしたものだと言葉は確信する。それでいい。デッキ構築やチューニングの世界は試行錯誤を繰り返してこそ

良い仕上がりになる。そして遊英の提案。

「なあ、ちよつと俺を助手席にのせてテストドライブといかないか？」

「わかった。じゃあよろしく頼むよ。」

そしてハイウェイに入る。

「(このDRW、290キロは出てるけど、やはり300キロには届かない。というよりもハンドリング操作が少々不安定だ。)」
と遊英は考える。するとケンからは、

「どうかな、このセッティング？」

「スピードが少々足りないのとハンドリングが不安定なところだな。お前も300キロは出したいと思うだろ？」

「そうだけど・・・。」

少しの間、沈黙が続いた。そしてしばらくして遊英の提案。

「今晚、お前のDRWをうちに預けてくれ。」

「え、どうするんだ？」

「2週間あればいい、ハンドリングを安定化させ300出せるエンジンに仕上げてやる。どこまで結果でるかはわからないが。」

「わかった、今晚は預けるよ。」

「それじゃ、決まりだな。そろそろハイウェイ降りてお前のデスクでも見せてもらおうか。」

22:05 某パーキングエリア

ケンのデスクは通常モニター多めのデスクだ。面白そうだな。通常モニターはいろいろなサポートを受けられる。

「じゃあ遊英、デュエルしようぜ。面倒くせえからスタンディングでな。」

「ああ。」

「デュエル！」

「先行はケンからでいい。」

「ならありがたくもらうぜ。俺のターン！」手札6

「魔法カード、古のルール！手札からレベル5以上の通常モンスターを特殊召喚する。つまり、レベル8のゴギガ・ガガギゴを手札から特殊召喚！」

ゴギガ・ガガギゴ ATK2950 DEF2800 水 爬虫

類 通常

「さらに俺はジェネティックワーウルフを召喚！」

ジェネティックワーウルフ ATK2000 星4 獣戦士 通常

「先行1ターン目は攻撃できない。俺はカードを1枚伏せてターンエンド。」

手札2枚

遊英のターンだ。

「俺のターン。まずは手始めにサイクロンだ。伏せカードを破壊！」
伏せカードはジャステイブレイクだった。相手の攻撃時に通常モンスター以外をすべて破壊する罠カードだ。

「さらにダーク・リードを発動！終末の騎士を攻撃表示で出さず。」

ダーク・リード (オリジナル) 速攻魔法

手札からレベル4以下の闇属性モンスターを特殊召喚する。

終末の騎士

レベル4 闇 戦士 ATK1400 DEF1200 各種召喚に成功した時、デッキから闇属性モンスターを墓地に送れる。

「終末の騎士の効果でダーク・サファイアドラゴンを墓地に送る。

ダーク・サファイアドラゴンを攻撃表示で特殊召喚。」

ダーク・サファイアドラゴン (オリジナル)

ATK1900 DEF1600 闇 ドラゴン 効果 星4

このカードがデッキから墓地に送られた時に発動できる。

墓地のこのカードを特殊召喚する。

通常召喚権を残しつつ、2体のモンスターを展開する遊英。こままでの手札枚数は3枚。

「さらに、ダーク・ニンジャ・サスケを特殊召喚！」

ダーク・ニンジャ・サスケ (オリジナル)

星4 闇 戦士 効果 ATK1800 DEF1000

自分がレベル4以下の闇属性モンスターの特殊召喚に成功した時、

このカードを手札から特殊召喚できる。

「俺は終末の騎士とダーク・ニンジャ・サスケをリリースし、墮天使ゼラートをアドバンス召喚！」

墮天使ゼラート

ATK2800 DEF2300 闇 天使 効果 星8

自分の墓地に闇モンスターが4種類以上いる場合、闇モンスター1体のリリースで召喚できる。手札から闇モンスターを1体墓地に送ることで、相手のモンスターを全滅。これを使ったターンのエンドフェイズに自身を破壊。

遊英の圧倒的なコンボに啞然とするケン。

「手札の闇モンスター・ダーク・グレファアを墓地に送り、ケンのモンスターを一掃するぜ。そしてバトル、2体のモンスターでダイレクトアタック！」

「うあつ。」ケンLP40000

遊英は見事ワンターンキルを成立させた。その凄さにケンは疑問を抱く。

「遊英はやっぱ強いな。俺も強くなれるかな？」

「当然だ。道のりは長いけど、きつと強くなれる。俺だって最初は弱かったさ。」

そしてケンの結論、

「俺、何としても強くなるために頑張るよ。それまで待っていてくれよ、遊英。」

「ああ、わかった。今日はもう遅いから引き上げた。DRWを持ってきてくれ。」

翌日、俺は仕事帰りに徹夜で仲間のケンの為にDRWのセットイングをした。そして、俺の余りのカードを調べ、ケンのデッキに無かったシナジーのあるカードをDRWに忍ばせておいた。

デッキとはたくさんを試行錯誤を繰り返して最高の仕上がりになる。ハンパな気持ちでデッキを構築すると仕上がりは悪くなる。

デュエルとは自分のデッキのことなどいろいろな事が分かる絶好のチャンスでもあるのかもしれない。

俺は一生このダークデッキを信じて生きていく！

続

Stage 2 ケン（後書き）

いつクロスオーバーな話になっても良いように覚悟して見てください。次話も宜しくお願いします。

Stage 3

出会い（前書き）

今回は5d、sから遊星とジャックが登場しますが、デュエルはありません。会話のみになります。ここで注意点をおさらいします。文法やライフ表記・文字などの間違いがあってもお許しください。実在するカードの効果の解説は簡単にさせていただきます。今はクロスオーバー作品ではありませんがいずれそうなりますのでご了承ください。たぶん意外な作品のキャラになります。不定期更新です。

ではよろしく願いします。

Stage 3 出会い

某日 13:08 チューニングショップ

何の用なのか知らないが、店長から遊英のコールに反応する。

「遊英、ちよつといいか？」

「はい、なんでしょう？」

「このDRWのパーツをメモに書かれている場所に持って行ってきてくれないか？」

メモには「ポツポタイム前 ガレージ」と書かれてある。どこだろうと疑問を抱える遊英だが、DRWにあるGPS機能で場所も特定できるため容易いことだ。

「わかりました。」

「じゃあ、よろしく頼むよ。」

13:40 ポツポタイム前ガレージ

俺は店長の頼みにより預かった荷物を出した。注文者の欄を見るとなんと驚いたことに、「不動遊星」の文字が書かれている。俺は少々緊張しながらインターホンを押す。

「あの、荷物のお届けに参りました・・・。」

するとガレージから英雄・不動遊星が出てきた。

「有難う。中に入ってくれ。」「では、お邪魔します。」

ガレージの中は沢山のDRWのパーツのほか、パソコンも置かれてある。そして、2台のDRWに目をつける。1台は赤のSE3P RX-8、もう1台は白のCT9A ランサーエボリューション9だ。

「このDRWは遊星のDRWですか？」

「赤のRX-8は俺のものだが、白のランエボはジャックのものだ。」

「なんとこの2台のDRWは英雄たちのものだということ聞いて驚く遊英。と同時に携帯電話の音が鳴る。店長だ。」

「もしもし、遊英です。」

「荷物は届けてくれたかね。」

「はい、問題なくミッション完了です。」

「そうか、有難う。ついでで悪いのだが、遊星の仕事の手伝いをしてくれないか？なあに、チューニングやセッティングのことだ。依頼を受けたのだが、わしはちょっと用事があるのでな。」

「そうですか、分かりました。」

「すまないな。ではよろしく頼むよ。才能のある君を信じているぞ。」

携帯電話の会話を終了した。すると遊星が、

「誰から電話だったんだ？」

「あ、店長からです。店長に何か依頼でもしてましたか？」

「ああ、その人にチューニングの手伝いを依頼してたんだが・・・。」

「店長は用事でこられないそうです。だから店長が俺に遊星の手伝いをしてくれとさつき頼まれたもので。」

「そうか、じゃあちよつと来てくれないか。」「わかりました。」

彼の名前は不動遊星。幾多の危機を救ってくれた英雄の一人である。世の中には不必要なものがいっぱいあるのかもしれない。しかし遊星は違う。「この世の中に不必要なものなど1つもない。」という良い考えを持っていて、ジャンクのものも直すという凄い手の持ち主でもある。人呼んで、「生きたスクラップ・リサイクラー」。彼の本業は研究員なのだが、裏ではチューナー（DRWを改造する者）をやっている。評判は良いらしい。彼のDRWのセッティング傾向としては、スピードとハンドリングのバランスのとれたセッティングだ。彼の搭乗するDRWは赤のSE3P RX-8。Dホイール

の時の色と変わらない赤。

「じゃあ、このパーツをここに取り付けてくれないか?」「はい。」
遊星の言うままに手伝いを続ける遊英。

「遊星さん、セッティングは全部自分でやっているんですか?」

「ああ、俺のDRWはもともとジャンクの山から拾ってきて直した
ものだがな。ジャックのDRWは全部俺がやっている。」

「ジャンクですか。その割には凄い仕上がりなんですね。」

「ああ、あれも君の店の人たちのおかげでもあるんだがな。」

なんとということが。俺の働いているチューニングショップが遊星
と関わっていたなんて。

数時間後

「よし、完成だな。」

と確認をする遊星。とそのとき誰かが入ってきた。ジャック・アト
ラスだ。

「遊星、チューニングは出来たか?」

「ああ、ちょうど終わったところだ。」

「そうか、仕上がりが楽しみだ。」

と期待をするジャック。そこで遊星の提案が。

「よし、22時にハイウェイに出てテストドライブでもしよう。遊
英もどうだ?良かったらBパーキングエリアに来てくれ。」

「はい、行きます。」

「俺やジャックにさんや敬語はいらない。」「そうですか。」

「遊星、この者は誰なのだ?」

「ああ、手伝いの依頼をしていた遊泳だ。」

「どうも、遊英です。」

長い会話が続いた。遊星やジャックはただものではないと確信す
る遊英。今夜のテストドライブ同行することとなった遊英はそのと

きを楽しみにしていた。

21:10 チューニングショップ

「では、失礼します、店長。」

「おう、気をつけてな。」

仕事を終え、すぐさま家へと帰る遊英。急いで晩飯を食べ、自分のDRWのセッティングをする。俺のDRWとデッキでは二人に通用するのかわからないが、一度テストドライブに付き合うと決めたからには、引くわけにも行かない。そして、

22:00 Bパーキングエリア

「待っていたぞ、遊英。」

と、とても待ちわびたジャック。

「早速だが、テストドライブに移るか。」

「うん。遊星とジャックのDRWとデッキがどんなものなのかを知りたいと思うとワクワクしてくる。」

遊英は早くテストドライブに移りたいかのように期待している。

3人はDRWに乗り、ハイウェイへ飛び出していった。

「（やはり二人は速い。300キロを軽く超えてやがる。動きもしつかりとしている。さすがは生きたスクラップ・リサイクラーと元キング。）」

「さあ、折角役者が揃っているのだ。デュエルだ！」

と、ジャックが突然の提案をした。

「ああ、こうやってデュエルをするのも久しぶりだな。遊英も来い。バトルロワイヤルだ。」

「ああ！スピードワールドX、セット！」

デュエルモード オン バトルロワイヤルモードに移行します

「レーシングデュエル、アクセラレーション……」

続

Stages 3 出会い(後書き)

次話もよろしくお願いします。PC投稿のみとなっておりますが、携帯でも投稿することがあります。

Stage 4 テストドライブ(前書き)

4話です。ではよろしくお願いします。

Stage 4 テストドライブ

「レーシングデュエル、アクセラレーション!!!」

レーシングデュエルの始まりは先行を決めるハイスピードバトルからだ。

「あのトンネルを抜いたら先行だ。」と遊星は提案。3台のDRWはフルスロットル状態・時速300キロオーバー。トンネル出口まで500m、400m、どんどん迫っていく。そしてトンネル出口、ほぼ同着のように見えた。しかし遊星とジャックは、

「速いな、遊英。お前から1番手だ。」

「フン、1番はくれてやる。遊英のターンだ。」

と言った。2人には俺が1番だと言ったことが見えていたのか？結局、俺、ジャック、遊星の順になった。

「なら、俺のターン！」手6 遊英S1 遊星S1 ジャックS1

「俺は手札のダーク・ホルス・ドラゴンを墓地に送り、ダーク・グレファアを特殊召喚！」

ダーク・グレファア

atk1700 def1600 闇 戦士 星4 星5以上の闇
モンスター1体を捨てて手札から特殊召喚できる。手札から闇モンスター1体を捨て、デッキから闇モンスター1体を墓地に送れる。

「ダーク・グレファアの効果で手札からキッズデビルを墓地に送り、デッキからネクロガードナーを墓地に送る。」

ネクロ・ガードナー

闇 星3 戦士 atk600 def1300 墓地のこのカードを除外し、相手の攻撃を1回だけ無効にできる。

「俺はカードを1枚伏せてターンエンド。」
遊英 手2

「俺のターン！」ジャック手6 遊英S2 遊星S2 ジャックS2

「相手フィールド上にしかモンスターがない場合、俺はこのカードの攻守を半分にして特殊召喚できる！バイス・ドラゴンを特殊召喚！」

バイス・ドラゴン

星5 ドラゴン 闇 atk2000 def2400 相手のフィールドにしかモンスターがない場合、手札から特殊召喚できる。その時攻守半分。

「ダーク・リゾネーターを通常召喚！」

ダーク・リゾネーター

闇 悪魔 星3 チューナー atk1300 def300
1ターンに1度だけ戦闘では破壊されない。

「レベル5のバイス・ドラゴンにレベル3のダーク・リゾネーターをチューニング！王者の鼓動、今ここに列を成す。天地鳴動の力を見るがいい！シンクロ召喚！我が魂、レッド・デーモンズ・ドラゴン！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン

闇 ドラゴン 星8 シンクロ・効果 atk3000 def2000

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

守備モンスターを攻撃した場合、ダメージ計算後に相手の守備モンスターを全て破壊。エンドフェイズ時に表で居る場合、攻撃宣言していない自分モンスターを全て破壊。

「(ジャックの奴、ファーストターンからエースモンスターを出してきやがった……。パワーは伊達じゃない……。)」と考える遊英。ジャックは確かにバイス・ドラゴンの特殊召喚からダーク・リゾネーターの特殊召喚が得意だ。

「各プレイヤーはファーストターンに攻撃できない。カードを2枚セットしてターンエンド。」
ジャック 手4

次は遊星のターンだ。

「俺のターン！」遊星手6 遊英S3 ジャックS3 遊星S3

「スピードスペル、エンジェル・バトンを発動！スピードカウンターが2以上あるとき、デッキからカードを2枚ドロース、手札から1枚を墓地に送る。俺はボルト・ヘッジホッグを墓地に送る。」

ボルト・ヘッジホッグ

機械 星2 atk800 def800

自分フィールド上にチューナーが居る時、墓地から特殊召喚できる。そうした場合、フィールドから離れた場合、ゲームから除外。

「手札のレベル・ステイラーを墓地に送り、クイック・シンクロンを特殊召喚！さらにクイック・シンクロンのレベルを1下げ、墓地のレベル・ステイラーを特殊召喚！さらに、ニードル・ガンナーを通常召喚！」

クイック・シンクロン

機械 星5 風 atk700 def1400

手札のモンスター1体を墓地に送り、手札から特殊召喚できる。このカードをシンクロ素材とするとき、「シンクロン」と名の付いたモンスターの代わりになるが、「シンクロン」と名の付いたモンスターを指定しているシンクロモンスターのシンクロ素材のためだけに使用できない。

レベル・ステイラー

atk600 def0 昆虫 闇 星1 効果

墓地に居る場合、自分のレベル5以上のモンスター1体のレベルを1下げ、墓地から特殊召喚できる。アドバンス召喚以外のためにリリースできない。

ニードル・ガンナー

atk100 def100 機械 星1 地

このカードをシンクロ素材としたシンクロモンスターは貫通能力を得る。

「さらに、自分フィールド上にチューナーが存在するとき、墓地のボルト・ヘッジホッグを特殊召喚！レベル1のレベル・ステイラーとニードル・ガンナーにレベル2のボルトヘッジホッグに、レベル4となったクイック・シンクロンをチューニング！集いし闘魂が、大地を揺るがす弾丸となりて全てを砕く！光指す道となれ！シンクロ召喚！大地の戦士、ジャンク・ガトリングブレイカー！」

ジャンク・ガトリングブレイカー（オリジナル）

atk3000 def1900 地 戦士 シンクロ・効果 星8

ジャンク・シンクロン+チューナー以外のモンスター2体以上

このカードが戦闘によって破壊したモンスターはカード効果によって破壊された扱いになる。このとき、相手はカード効果によって破壊されたときに発動する魔法・罫・モンスター効果を発動することができない。

「なにっ、ジャンク・ガトリングブレイカーだと!? 遊星の奴、いつの間に。」

遊星の新たなシンクロモンスターの登場により、一時焦るジャック。DRWのモニターを見てみると、強力な効果を持っていることが分かる。

「俺は、カードを1枚伏せてターンエンド。」遊星 手2

Next player is 遊英

「俺のター・・・ん」 ガシャアアン

突如、前に居るレーシングデュエル中の2台のDRWのうち、1台がクラッシュしたのが見えた。

「おい、どうした遊英?」

「待て、ジャック。前を見る。」

前にはDRWの悲惨な姿が見える。3人は慌てて近くへ駆け寄り、安全を確認した。

遊英たちはDRWのモニターを操作し、デュエルを強制終了した。

「おい、大丈夫か? ってお前はマイケルじゃないか。」

なんと、クラッシュに巻き込まれたのは以前俺とレーシングデュエルをしたマイケルだった。当然、重症だった。

「はは、お前は遊英じゃねえかよ。ちーとボスの怒りに触れてしまったようだぜえ・・・。」

そして、ジャックが話しに割り込んできた。

「遊英、こいつを知っているのか？」

「この間俺とレーシングデュエルしたチンピラ野郎だ。」

「それよりも、出血がやばいな。今救急車を呼んでやるからな。」
10分後、救急車が到着し、救急隊がマイケルの救助に当たった。
3人の的確な判断により、マイケルは命を取り留めた。

「やれやれ、折角のテストドライブが台無しだな。」

と遊英はがっかりした。

「全くだ。」とジャックも続く。

翌日 10:28 某病院

俺はちょうど仕事が休みだったので（暇つぶしに？）病院に向かい、マイケルの病室を訪れてみた。

「おい、元気か？」

「よお、遊英か。いつたい俺に何のようだあ。」

相変わらずマイケルはチャライしゃべり方だ。

「マイケル、昨日デュエルしていたボスってのは誰なんだ？」

「あいつはカード盗賊団・デュエルハンターズのボス・バロウだ。」

おめえに負けたのをボスは知って大激怒だぜえ。そして俺はその盗賊団の一員だったってワケだ。俺を脱退させるためにデュエルを仕掛けてきやがった。奴は負け犬と分かったら、容赦なく相手のDRWにぶつけてクラッシュさせる奴だ。俺はもうデュエル・ハンターズに居るのはこりごりだぜ。」

そして遊英の返答。

「そうか。なら俺が奴を潰してきてやる。」

「遊英、奴に関わらないほうがいいぜ。お前も俺様のような様になりたいのか。」

「バカヤロウ、ほつといたらまたお前を狙ってきたり、またカードを奪いにやってくる。おまえも普通のデュエリストになるうぜ。」

遊英はマイケルの忠告を無視した。

「そうか、度胸はあるんだなあ。ボスのアジトはここだ。仲間も大勢居るからこちらにも出来る限り仲間連れとけよ。」
とマイケルは言い、遊英にアジトの場所が書かれたメモを渡した。

14:21 ポツポタイム前ガレージ

中には俺、遊星、ジャック、そしてセキュリティのクロウまでいた。クロウもデュエル・ハンターズの話聞きつけてきたようだ。

「そういうわけか、おもしれえ。ならそのデュエル・ハンターズとやらを今夜に潰しにいこうぜ。」

「協力助かる。」と感謝する遊英。もちろん、遊星とジャックも一緒にいて来てくれるようだ。

「相手はどんな奴なんだ？」という遊星の質問に遊英が、

「相手はバロウという奴だ。負け犬と分かったらクラッシュに追い込むらしい。」

と話を続けた結果、今夜敵のアジトに乗り込むことに決定した。

19:40 デュエル・ハンターズアジト入口前

俺と遊星、ジャック、そしてクロウは覚悟を決め、侵入を試みるのだった……。

続

Stage 4

テストドライブ（後書き）

次話からOCGのカード効果の解説はさらに簡易的もしくはカットする場合があります。OCGの効果でいきます。また、スピードカウンターの消費はスピードワールドの効果・スピードスペルでの消費によって減るもので、1000以上のライフの減少ではスピードカウンターは減らないものとします。では次話もよろしくお願ひします。

S t a g e 5 攻略、そして新天地へ（前書き）

5話です。それではよろしく願いします。

Stages

攻略、そして新天地へ

19:40 デュエル・ハンターズ アジト入口前

「それじゃ、派手に行きますかあ！」

という遊英の一声で潜入を開始した。

アジト内部

「侵入者だ！デュエルでぶっ潰せ！」

手下が俺たちの侵入に気づいたようだ。面倒なことになりやがった。だが、マイケルのためにも必ず生き残らなければ。

「いいだろう、相手になつてやる！」

という遊星の掛け声で4人はデュエルディスクをセットした。

「墮天使ゼラトでダイレクトアタック！」 手下 LP0

「ジャンク・ウォリアーでダイレクトアタック！スクラップ・フィスト！」 手下 LP0

「クリムゾン・ブレイダーでデーモン・ソルジャーに攻撃！レッド・マードー！」

クリムゾン・ブレイダー atk2800 vs デーモン・ソルジャー atk1900 手下 LP8000

「BF 疾風のゲイルで攻撃力が0になったジェネティックワウルフを攻撃！ブラック・スクラッチ！」 ゲイル atk1300

vs ジェネティックワウルフ 楔力ウンター効果 atk2000 手下LP0

4人は手下（いや、ここは雑魚とでも言っておこうか）を次々と倒していき、ボスのバロウのもとへ急いだ。「雑魚はいても数だけが多いな。」と呟くジャック。数が多くても雑魚は雑魚。俺たちが絶対やつをぶっ潰してやる！

20:08 アジト ボスの部屋

「よくぞここまでやってきたものだなあ、カス共め！何の用かあ？」
ボスの声が聞こえる。バロウだ。

「バロウ。単刀直入に言うが、デュエル・ハンターズを潰しに来た！」と遊英は返答。

「ハン、この俺を潰せる訳がねえだろ、バーカ。何なら、こちらも単刀直入に言うが、お前のデッキを賭けてデュエルだ！クラッシュの俺だが今日のはめんどくせーからスタンディングだ！」

「いいだろう、相手になつてやる！ぜつてーお前を潰してやるから覚悟しとけよ！」

遊星たちは遊英が受けて立つのを止めなかった。なぜなら遊星たちは絶対遊英が勝つと信じているのだから。ボスのことだ。おそらくバロウも人のカードを盗んで自分のデッキに入れているのだろう。

「デュエル！！」

「先行はこの俺バロウ様だあ！俺のターン！」手札6

「俺は魔法カード、火炎地獄を発動！俺は500のライフダメージを受けるが貴様に1000のライフダメージを受けてもらうぜえ！」

「ぐつ。」 遊英LP3000 バロウLP3500

「さらに魔法カード、ファイヤー・ボール発動！相手に500ポイントのダメージを与える！」

「ぐう。いきなり2枚のバーン効果で結構ライフを削ってきてやる・・・。」 遊英LP2500

「俺はヴォルカニック・エッジを召喚！」

ヴォルカニック・エッジ atk1800 炎 炎族 星4

「先行は最初のターンに攻撃できないが、攻撃しない代わりに相手に500のダメージを与えるぜ！」

「うわっ。(もうライフが半分に……)」遊英LP2000

「カードを1枚セットしてターンエンドだあ。さあ、どこまでやれるかなあ？」手札2枚 伏1

遊英のターンだ。ここで巻き返す！

「俺のターン！俺は手札の堕天使ゼラートを墓地に送り、ダークグレファアを特殊召喚！」

ダーク・グレファア atk 1700

「さらに終末の騎士を召喚！こいつが各種召喚に成功した時、デッキから闇属性モンスターを墓地に送る事ができる。俺はネクロ・ガイドナーを墓地に送る。俺はカードを2枚伏せてターンエンド。」

終末の騎士 atk 1400 闇 星4 手札1

枚 伏せ2

「何だあ、攻撃力が低いやつしか出せないのかあ？」というバロウの言葉に遊星は、

「デュエルはレベルや攻撃力だけでは決まらない！」

「はっ、強がつてるのも今のうちだぜえ？とつとと終わらせてお前のデッキを狩るとするかあ！」

「俺様のターン！」バロウ 手札3枚

「俺は溶岩魔神 ラヴァ・ゴーレムをテメエのフィールド上に特殊召喚！」

「なに！？(俺の2体のモンスターはリリースされるが攻撃力は3000と高い。だがなぜ攻撃力の高いモンスターを俺にプレゼン

トするんだ？何か嫌な予感がする……。）」
溶岩魔神ラヴァ・ゴーレム atk3000 炎 悪魔

「ラヴァ・ゴーレムをプレゼントしたターン、俺は各種召喚が出来ない。カードを1枚セットしてターンエンド。」手札1枚 伏せ2

「俺のターン！ うおっ！」 遊英LP2000 1000 手札2枚

遊英に溶岩が降りかかった。嫌な予感はずたが本当だったとはな。

「はっはっは！ラヴァ・ゴーレムはてめえのスタンバイフェイズ毎にコントローラーに1000ポイントのダメージを与える呪われたモンスターでもあるのだ。」

「ならバトルだ！ラヴァ・ゴーレムでヴォルカニック・エッジを攻撃！遊英ファイヤー！」

デュエルは真剣にやっているが、ある名ゼリフのことで一瞬遊英は笑いかけた……。

「畏発動、闇の呪縛！ラヴァ・ゴーレムを選択。こいつがある限り、選ばれたモンスターは攻撃力が700ダウンし、攻撃と表示形式の変更をできなくするぜ。」伏せ1

こいつはやべえ。今は耐えるしかないようだ。いつか逆転のチャンスはあると信じてやるしかない！

「俺はモンスターを裏側守備表示でセットしてターンエンド……。」

「手1 伏1 モンスター伏1 ラヴァ・ゴーレム

「俺様のターン！ふん、俺はヴォルカニック・エッジをリリースし、シャドウ・ナイトをアドバンス召喚！」手札2 1

シャドウ・ナイト (オリジナル)

戦士 星4 闇 atk2400 def800

このカードをアドバンス召喚する場合、リリースするモンスターはレベル4以下でなければならぬ。このカードがアドバンス召喚に成功したとき、このカードの攻撃力はリリースしたモンスター1体の攻撃力の半分の数値分アップする。相手はこのカードを攻撃対象に選択できない。このカードは召喚したターンに攻撃することができない。このカードが墓地に送られたとき、このカードをアドバンス召喚するために墓地に送られたモンスターが墓地に存在する場合、そのモンスターを守備表示で特殊召喚できる。

「伏せていた魔法カードを発動、リニアキャノン！自分のモンスターをリリースし、そのモンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える！これで終いだ！」伏せ0

「「遊英！！」「」と3人の声が聞こえる。

「俺は手札のダーク・モンク・ファイターを墓地に送り、このダメージを0にする！！」手札0

ダーク・モンク・ファイター（オリジナル）

闇 岩石 星3 atk1300 def1000

自分への効果ダメージまたは戦闘ダメージが発生した場合、このカードを手札から墓地に送ることで、そのダメージを0にする。

「ちっ、しのぎやがったか。生命力だけはあるんだなあ、生命力だけは！シャドウ・ナイトの効果でリリースしたヴォルカニック・エッジを特殊召喚する。ターンエンド！次こそ終わりだ！」

「（頼むぜ、俺のダークモンスター達。俺は諦めないぜ。だから力を貸してくれ。）俺のターン！！」
来たか！ ドローと同時にラヴァ・ゴーレムの溶岩が遊英に襲い掛かる。

「畏発動！バトルペナルティ！」

バトルペナルティ（オリジナル） 通常畏

自分のライフが1000以下の時に自分への効果ダメージが発生した場合に発動できる。その効果を無効にし、相手に500ポイントのダメージを与える。

「くつ。なんだあ、たったの500ポイントじゃねえか。」バロウLP3000

「だが、良いカードを引かせてもらったぜ！俺の墓地には墮天使ゼラト、ネクロ・ガードナー、ダーク・グレファー、終末の騎士、ダーク・モンク・ファイターがいる。よってこのカードを特殊召喚できる！来い、ダーク・エメラルド・ドラゴン！」

ダーク・エメラルド・ドラゴン（オリジナル）

闇 星6 atk2400 def1400 ドラゴン

このカードは通常召喚できない。自分の墓地に闇属性が5種類異常存在する場合に特殊召喚できる。このカードが手札からの特殊召喚に成功したとき、このカードの攻撃力は400ポイントアップし、フィールド上の魔法・畏カードを1枚選択して破壊できる。

atk2800 手0

「ダーク・エメラルド・ドラゴンの効果で闇の呪縛を破壊！バトルだ！ダーク・エメラルド・ドラゴンでヴォルカニック・エッジに攻撃！」

ヴォルカニック・エッジ撃破！たかがレベル4ごときに苦戦するとはな・・・。

「行け、ラヴァ・ゴーレム！バロウにダイレクトアタック！遊英フアイヤー！」

「ぐおおおおおおおっ！」バロウLP3000 0

21:11 アジト外部

クロウの通報により、セキュリティがアジトに乗り込み、デュエルハンターズは事実上解散した。一件落着と行ったところか。

「なぜだあ、最強のカード盗みそれを厳選し、完璧なデッキを作ったというのに、なぜだ。」とバロウは悔しがる。そこで遊英が、

「デュエルは強いカードこそが全てじゃない。遊星のように攻撃力やレベルの低いモンスターでも可能性が秘められているんだ。それにカードは持ち主の心にしか応えてくれないものだ俺は思ってる。」

アジトの人間は全て車両に乗せられ、収容所へと運ばれた。遊星たちは「またな」のセリフとともにこの場を去っていった。とそこへ、

「遊英〜！」

「マイケル、無理すんなよ。外出許可は取ったのか。」
なんと、入院中のマイケルがやってきた。

「ああ、なんかセキュリティのサイレンが鳴ってて気づいたんだ。遊泳の奴やつたんだなと。」

「そうか。」

「遊英、いや、兄貴い〜！」

マイケルの感動のあまりに俺に泣きついてきた。

「やめるよ、俺は空見 遊英だ。」

「兄貴、俺、普通にデュエルをやるよ。もう盗みなんてしねえよ。」

「そうか。おい、お前DRWの知識はあるか？」

突然遊英がマイケルにDRWについて質問してきた。何を聞き出す

と言つのか？

「あるある。本当だって。」

「なら、俺の働いてるチューニングショップに来いよ。」

3日後 10:20 チューニングショップ

店長が集合の合図を出した。

「今日から新しい仲間が来た。マイケルだ。」

「よろしくお願ひします！」マイケルの奴、立派に改心したようだな。俺も一安心だ。ほかの客からは、「DRWの知識あるんですね

」「デュエルも強いんですね。」と言つマイケルへの言葉で評判が上昇。

マイケル、これからもよろしく頼むよ。

22:00 チューニングショップ (閉店時間)

「どうした、遊英。」

「店長、俺、Bゾーンの東京へ旅に出ます。」

Bゾーンとは、開通したワープホールに入ることで行ける、ニホンという空間のことだ。今俺がいるネオドミノシティはAゾーンだ。

この地球は、少々空間がずれている。そこでワープホールを開発し、別空間へいけるようにしたのだ。

「いきなりどうしたんだね。遊英は最高の店員だというのに。」

「いえ、マイケルも十分に最高です。だから俺はマイケルを紹介したんです。俺は東京で己の実力を試したくなつたんです。もちろん旅費はあつちで稼ぐつもりです。」

「そうか、ならこちらからも止めない。思いっきり暴れてくるかい。」「とそこへマイケルがこの話を聞きつけてきた。

「兄貴、Bゾーンに行くのか？」「ああ。」

マイケルは、

「少し寂しいかもしれないけど、店なら俺たちに任せてくれ。ただし、いつかは戻って来いよ！」

「ああ、約束しよう！」と遊英とマイケルの漢の約束をした。

Bゾーンには東京都と神奈川県と言ったところがある。そこには首都高速道路の形をかたちどった「首都高サーキット」がある。そのサーキットには東京のC1エリア、新環状エリア、神奈川の湾岸線エリア、横羽線エリア、みなとみらい線エリアがある。東京エリアと神奈川エリアのそれぞれのエリアに2人のキングがいるらしい。俺はその2人を撃墜してみせる！

遊星たち、仲間たちに、Bゾーンにいくと告げ、俺はレーシングデューエルの聖地・首都高サーキットへ向かうためにワープホールへ向かった。

Speedcrossの本領はここからなのかもしれない・・・。

Stages

攻略、そして新天地へ（後書き）

次からニユーステージ篇から首都高サーキット篇に変わります。6話以降からクロスオーバー作品です。予定としては、「とある魔術シリーズ」「けいおん!」「他の遊戯王シリーズ」「涼宮ハルヒシリーズ」キャラの登場を予定しています。どれも高校を卒業し、大人になったときの人物とします。首都高サーキット（Bゾーン）の主要人物・ヒント：ハルヒシリーズから（カタカナ3文字）、けいおんシリーズから（漢字4文字）です。もう分かるかな？シリーズは5話6話位で1シリーズ終わるって感じですよ。改稿があるのは文字ミスの訂正です。長いあとがきとなりましたが次話もよろしく願います。

Stage 6 聖地(前書き)

新シリーズ・首都高サーキット篇です。そろそろクロスオーバー作品です。ご注意ください。ではよろしくお願いします。

スピードスペルを発動することによってカウンターは減らない設定です。

Stage 6 聖地

22:00 首都高サーキット 東京 某パーキングエリア

俺は2人のキングを撃墜するためにこの東京に来たが、良い手掛かりは今のところ見つからない。2人は幻か？いや、そんなわけない。きつと遭遇できるはずだ。それから数分後、3台のDRWがパーキングエリアにやってきた。奴らもレーシングデュエリストか？これはチャンスかもな。すると、3人の内1人は俺に近づいて話しかけてきた。

「なあ、アンタ？お前もレーシングデュエリストだろ？」

男だった。まあ、盗賊団時代のマイケルみたいなチンピラじゃなくてよかったぜ。お調子者か？まあいいか。その質問に遊英が、

「ああ。どうかしたのか？」

「せっかくだから、デュエルでもしようぜ。もちろんレーシングデュエルでな。」

デュエルか、面白い。ついでにキングについても聞こうか・・・。

「いいぜ。東京のC1外回りだろうだ？」

「オツケー。じゃ、始めますかあ！」

2台はC1エリアに向かっていった。

「スピード・ワールドX、セット！」という遊英の言葉でデュエルのスタンバイができた。

「レーシングデュエル、アクセラレーション！！！」

「トンネルを抜けたら先行だ！」「ああ。」

男は提案する。えっと、対戦車情報は、林 トモキか。搭乗車両は三菱・シルバーのCN9Aのランサーエボリューション4だ。ケンが乗っているエボ3のひとつ新しいモデルだ。

トンネルの出口はヘアピンコーナーの出口あたりにある。2台はドリフトでヘアピンコーナーで差し掛かる。俺のRが先行しているが林もグイグイくいついてくる。腕もなかなかのものだな。コーナー出口、先に抜けたのは、遊英だった。

「いくぜ、俺のターン！」 遊英手札6 遊英SPC1 林SPC1

「俺は終末の騎士を召喚！終末の騎士が各種召喚に成功したとき、デッキから闇属性モンスター1体を墓地に送れる。俺はゾンビキヤリアを墓地に送る。（ここは一気にシンクロ召喚をしたいところだが、少し様子を見よう……）」

終末の騎士 ATK1400 闇 星4 戦士

「俺はカードを2枚セットしてターンエンド。」 遊英手札3
次は林のターンだ。果たしてどんなデッキを使ってくるのか楽しみだ。

「俺のターン！」 林手札6 遊英SPC2 林SPC2

「俺はクレボンスを召喚！俺はカードを2枚伏せてターンエンド。」
林手札3

クレボンス ATK1200 闇 サイキック 星2

「両者様子見か。だが分かったことは相手のデッキはサイキック族のデッキか。」

「俺のターン！」 遊英手札4 遊英SPC3 林SPC3

「俺はスピードスペル、エンジェルバトンを発動！スピードカウンターが2つ以上あるとき、カードを2枚ドロし手札のカードを1枚墓地に送る。こいつを墓地に送る。」 遊英手札4 6 5

「俺はこのカードをデッキのトップに戻すことで墓地のゾンビキャリアを特殊召喚する！」

ゾンビキャリア ATK400 星2 闇 チューナー

手札4

「レベル4の終末の騎士にレベル2のゾンビキャリアをチューニング！希望の光が集まりしとき、大地を揺るがす戦士と化す！シンクロ召喚！大地の騎士 ギアナイト！」

大地の騎士 ギアナイト ATK2600 地 戦士 星6 シンクロ

「さらに俺はダーク・ヴァルキュリアを召喚！」

ダーク・ヴァルキュリア ATK1800 闇 星4 天使 デュアル（現在通常モンスター）

「バトルだ！ギアナイトでクレボンスを攻撃！」

「クレボンスは攻撃対象に選ばれたとき、ライフを800払うことで攻撃を1回無効化する！」

林LP3200

「なら、ダーク・ヴァルキュリアで攻撃！」

「クレボンスの効果で800ポイント払い、攻撃を無効化する！」
林LP2400

「俺はカードを1枚伏せてターンエンド。」遊英手札2

「俺のターン！」 林手札4 遊英SPC4 林SPC4

そこで遊英がこのタイミングで？と言うようなトラップを発動した。
「永続罨発動、闇次元の開放！除外されている俺の闇属性モンスター

ーを特殊召喚する。戻って来い、ゾンビキャリア！」

さあ林のターンの続きだ。弱小モンスターを攻撃表示で出しても対策はできてある。さあ来い！

「俺は手札を1枚墓地に送り、THE トリックイーを特殊召喚する！」林手札2

THE トリックイー ATK2000 魔法使い 風 星5

「さらにカバリストを召喚！レベル5のTHE トリックイーとレベル1のカバリストにレベル2のクレボンスをチューニング！シンクロ召喚！メンタルスフィアデーモン！」

メンタルスフィアデーモン ATK2700 闇 星8 シンクロ
サイキック

「バトル！メンタルスフィアデーモンでゾンビキャリアを攻撃！」

「トラップ発動、炸裂装甲！攻撃モンスターを破壊する！」

「残念だったな、メンタルスフィアデーモンの効果、1000ライフを払うことでサイキックモンスターを対象とする魔法・罠の発動を無効にし破壊する！」「なに！？」 林LP2400 1400

攻撃は続行だ。少々痛手だったな……。だが巻き返す！ 遊英LP4000 1700

結構痛いダメージは食らったが、デュエリストである以上、負けたくはない。

「俺はそのままターンエンド！」

「俺のターン！」遊英3 遊英SPC5 林SPC5

「俺はダーク・ヴァルキュリアをデュアル召喚！ダークヴァルキュリアが再度召喚扱いとしたとき、こいつに魔力カウンターを1個乗せる。これにより攻撃力は300アップし攻撃力は2100となる。それでも俺のメンタルスフィアデーモンには及ばないぜ。」

「どうかな？それは。」

「何だと？」

「ダークヴァルキュリアは魔力カウンターを外し、モンスター1体を破壊する。メンタルスフィアデーモンを破壊！」

「しまった！メンタルスフィアデーモンは効果モンスターの効果に對しては無効だ・・・。」

「さらに畏発動、トラップスタン！このターン全ての畏の効果は無効にする！」

「なんだと！？」

「バトルだ！ガイアナイトでダイレクトアタック！」

「うおおおおおっ！」

林LP0

22:57 某パーキングエリア

林の仲間たちはどうやら俺たちを追跡していたようだ。

「林、こいつは強かったか？」

と言う男Aの質問に林が、

「ああ、完敗だよ。」

遊英は質問をする。

「なあ、首都高の2人のキングについて知ってるか？」

それに対して男Bは、

「ああ、知ってるよ。東京のキングは黄色のFD（FD3SのRX-7）のひとで、神奈川のキングは青のインプレッサ（GDB-FのインプレッサSTI）のひとだ。神奈川のキングは男だけど、東京のほうは女子大生とも言われるぜ。そっぴや、おまえと同じくらいの歳かな？」

「俺は空見遊英だ。20歳。」

「そうなのか、じゃ、同じじゃないか。」

なんとキングが俺と同じくらいの歳だとはな。こりゃ面白いことになってきたな。

「情報をありがとう。じゃ俺は帰るよ。」

「キングに挑むんだろ、ガンバ！」と言う林の応援を受けて、

「ああ！」と遊英は活気ある返事をした。

翌日俺は資金集めのために「ガレージZERO」と言うチューニングショップで働くことにした。なんでもその店長はキングのことについて知っているらしい。俺はなんとしても2人を撃墜したい。何でもいいから情報をくれ。

22:30 ガレージZERO (閉店時間)

「遊英、ちよつといいか？」と言う店長・下野 元 (32)の声に

「はい、何でしょう？」と応える遊英。

「もうあがってもいいが、聞いてもいいか？」「はい……。」

「お前は、もしかして空見大希の息子なのか？」

なんと俺の親父のことを知っていたのか？

「はい、どうかしましたか？」

「お前が乗っているR35のGT-Rは大樹が乗っていたがただの車ではない。そいつは幻のマシンなんだ。」「幻のマシン？」

幻のマシン？このGT-Rが幻だって？見た目は普通の車じゃないか？

「幻のマシンは見た目はどこにでも売っている車だが、中身は全くの別物で意思を宿している。幻のマシンに乗り、幻をみせられた者は意思に取り憑かれ、心を狂わせると言うのだ。お前が乗っているGT-Rもまたその1台だ。」

「そうなんですか。初めて知りました。」遊英は驚きを隠せないようだ。

「また、東京のキングの黄色のFDに神奈川のキングの青のインプ

レッサも幻のマシんだ。それに乗るレーシングデュエリストも意思にとり憑かれたがもう乗りこなしている。遊英、お前も幻のマシンを乗りこなせるものだ。」

話が長くなりそうだ。俺が下野社長の会話をもとに解説をしよう。。。

東京のキングに君臨する黄色のFDは「太陽の女帝」と言われている。神奈川のキングの青のインプレッサは「蒼店の不死鳥」という。そして俺のGTRは「混沌の悪魔」と言われている。幻のマシンは代々乗るレーシングデュエリストが代わっていったが、中でも「混沌の悪魔」に乗るデュエリストは歴代で最強だったらしい。。。。この幻のマシンを親父が操っていたとは。。。。しかもこの3台は全て下野店長が完成させたと言う。幻のマシンは3台だけではないともいう。あーもうワケわかんねえ。

だが、有力な情報は十分に揃った。

必ず2人を撃墜してやる！

続

Stage 6 聖地（後書き）

次話もよろしくお願ひします。何かあったら感想で・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9264z/>

遊戯王 Speedcross

2012年1月15日00時48分発行